

男爵薯の普及における徳川農場の貢献について



日本いも類研究会会員 たけうち まさゆき
竹内 正行

1. はじめに

馬鈴薯に関する歴史資料調査を続けているが、徳川林政史研究所、北海道立図書館、秋田県立図書館、農林水産省図書館に所蔵されていた男爵薯の普及期（大正時代末期、1930年前後、昭和6年頃）における種子用男爵薯の分譲、PRに関する史料を紹介する。

2. 馬鈴薯史料調査の動機

馬鈴薯史料を調べるようになったのは、今から20年前のことである。当時、北海道の馬鈴薯農家を回りながら、図書館で馬鈴薯史料の収集をしていた。ある農家の方から紹介された梅村芳樹氏（故人、日本いも類研究会会長）の勧めもあり、日本いも類研究会へ入会することとなった。それ以来、馬鈴薯関連レポートを「いも類研究会ニュース」等に投稿するに至っている。

3. 徳川農場による種子用男爵薯の分譲に関する史料

（1）道内農事試験場への分譲

① 北海道庁立瀬棚農事試作場

A. 大正14年3月6日付種子分譲依頼

文書

徳川農場に男爵薯の種子分譲依頼を送付している¹。北海道庁立瀬棚農事試作場の便箋に、男爵薯7貫目を注文する内容の手紙である。

B. 大正14年4月29日付徳川農場稟議書

徳川農場の内部稟議書に、北海道庁立瀬棚試作場宛に鉄道便で、男爵薯7貫目を送付したことが記されている。

北海道庁立瀬棚農事試作場の史料がないため、なぜ徳川農場に種子用男爵薯の分譲依頼を行うことになったのか、また、分譲された種子をどのように用いたのかについては確認できない。

② 北海道農事試験場渡島支場

C. 大正14年4月21日付種子分譲依頼文書

郵便はがきで徳川農場に馬鈴薯分譲依頼を送付している²。

はがきには、徳川農場と事前交渉をした渡島支場の技手の氏名が記されている。

¹ 徳川農場（1925）『馬鈴薯研究所書類綴（大正9年度～大正14年度）』、（徳川林政史研究所所蔵）。

² 徳川農場（1925）『馬鈴薯研究所書類綴（大正9年度～大正14年度）』、（徳川林政史研究所所蔵）。

D. 大正14年4月29日付徳川農場稟議書

徳川農場の内部稟議書に、北海道農事試験場渡島支場宛に鉄道便で、馬鈴薯2貫目を送付したことが記されている。

北海道農事試験場渡島支場に分譲された種子が、渡島支場での馬鈴薯品種試験に使用されたことが次の4史料から合理的に推測できる。

イ. 北海道農事試験場(1928)『大正14年業務概要』

種苗台帳番号「渡支第1685号」、品種名「八雲」と記されている。

ロ. 北海道農事試験場(1928)『大正15年昭和元年業務概要』

品種名「渡支第1685号(男爵芋)」と記されている。

ハ. 北海道農事試験場(1932)『昭和3年業務概要』

品種名「男爵薯」と記されている。

ニ. 北海道農事試験場(1935)『北海道農事試験場時報91号』

渡島支場で行われた男爵薯の品種比較試験は、大正14年から昭和3年までと記されている。

なお、農林省農務局(1935)『道府県ニ於ケル主要食糧農作物品種改良事業ノ成績並ニ計画概要』では、奨励品種ノ来歴一で「昭和元年ヨリ渡島支場ニ於テ品種比較試験ヲ行ヒタル結果昭和3年奨励品種ニ決定ス」と記されている。北海道立道南農業試験場(1979)『北

海道立道南農業試験場70年史』では、「男しゃくいもは翌15年(1926)から供試された」と記されている。

(2) 道外農事試験場への分譲

秋田県立農事試験場

E. 昭和2年3月5日付種子分譲依頼文書

徳川農場に男爵等の種子分譲依頼を送付している³。

F. 昭和3年3月5日付種子分譲依頼文書

徳川農場に男爵等の種子分譲依頼を送付している⁴。

秋田県立農事試験場側の史料から、次のことが判明した。

ホ. 秋田県立農事試験場(1931)『昭和4年度業務功程』

昭和2年度、昭和3年度に購入した種薯に「男爵」が記されている。取寄先については記されていない。

ヘ. 秋田県立農事試験場(1932)『昭和5年度業務功程』

元種薯生産地は、「北海道德川農場」と記されている。

ト. 秋田県立農事試験場(1933)『昭和6年度業務功程』

男爵が、昭和2年から昭和6年まで取得したことが記されている。種薯生産地は、「北海道山越郡八雲町徳川農場」と記されている。

³ 徳川農場(1927)『昭和2年度馬鈴薯研究所書類綴』、(徳川林政史研究所所蔵)。

⁴ 徳川農場(1928)『昭和3年度馬鈴薯研究所書類綴』、(徳川林政史研究所所蔵)。

4. 徳川農場による種子用男爵薯のPRに関する史料

G. 徳川農場（1929）『昭和4年度宮城県農会主催東北六県北海道農会連合園芸共進会出品馬鈴薯解説書』
徳川農場が、男爵薯とアーリーローズを宮城県農会主催東北六県北海道農会連合園芸共進会に出品したことが記されている。

宮城県農会側の史料から、次のことが判明した。

チ. 宮城県農会（1930）『東北六県北海道農会連合園芸共進会報告』

「昭和4年11月1日より5日間仙台市で開催され、審査対象の普通出品は4,577点、馬鈴薯出品数は502点であった。馬鈴薯品種は、男爵薯、アメリカンウォンダー、メイクイン、スノーフレーク、アーリーローズ、三円、程ヶ谷、晩白等であった。徳川農場が金牌を受賞」と記されている。

5. まとめ

徳川農場の種子用男爵薯は、徳川林政史研究所所蔵の史料から北海道農事試験場渡島支場でおこなわれた馬鈴薯品種比較試験に供用された可能性がある。また、秋田県立農事試験場では、昭和2年より徳川農場の種子用男爵薯が使用された。これらのことから、男爵薯の普及期において徳川農場が一定の貢献を果たしたのは明らかである。ただ、徳川農場が分譲した種子用男爵薯のルーツについては、資料不足のため解明できなかった。本稿で紹介した資料は、男爵薯の普及する過程の一端を示すものである。

今後、先行研究とともに関連資料の一層の検討を加えることで、男爵薯の普及がどのように形成されたのか明らかにしていきたい。

参考文献

秋田県立農事試験場（1931）『昭和4年業務功程』。

秋田県立農事試験場（1932）『昭和5年業務功程』。

秋田県立農事試験場（1932）『昭和6年業務功程』。

徳川農場（1925）『馬鈴薯研究所書類綴（大正9年度～大正14年度）』。

徳川農場（1927）『昭和2年度馬鈴薯研究所書類綴』。

徳川農場（1928）『昭和3年度馬鈴薯研究所書類綴』。

徳川農場（1929）『昭和4年度宮城県農会主催東北六県北海道農会連合園芸共進会出品馬鈴薯解説書』。

農林省農務局（1935）『道府県ニ於ケル主要食糧農産物品種改良事業ノ成績並ニ計画概要』。

北海道農事試験場（1928）『大正14年業務概要』。

北海道農事試験場（1928）『大正15年昭和元年業務概要』。

北海道農事試験場（1935）『北海道農事試験場時報91号』。

北海道農事試験場（1932）『昭和3年業務概要』。

北海道立道南農業試験場（1979）『北海道立道南農業試験場70年史』。

宮城県農会（1930）『東北六県北海道農会連合園芸共進会報告』。